

震災後の福島大学生による学び/活動の事例紹介

2012年10月17日
福島大学行政政策学類

震災以前から、さまざまな形で地域活動を行ってきた実績のある福島大学生。
震災後も、被災者支援から福島の現状発信まで、今の福島で真に必要なとされる活動を積極的に行っていました。
そのほんのいくつかを紹介します。

1 ドイツの大学/小学校での福島の現状報告会

ドイツから多額の寄附が寄せられ、その寄附の使い道を報告するとともに、福島のいまの現状を広く伝えるために、学生たちが企画・準備した報告会をキール市内の小学校とボーフム大学で行いました（福島日独協会・SH独日協会とのコラボ）。



2 仮設住宅での活動

「仮設」住宅での生活が長くなるにつれ、「外」の人々の意識も薄れつつありますが、福島大学生は途絶えさせることなく仮設住宅での活動を続けています。



3 福島の農業復興に向けて

ゼミ活動の一環として、また学生が代表を務める「マルシェF」が企画・実施する「街中マルシェ」は、安心安全な福島の農産物の提供を通じて、福島における農業の復興を目指しています。



4 学生の力で世界とつながろうプロジェクト

全国各地、さらには世界から、同じ世代の学生たちを福島に招き、被災地を案内して、福島の現状を知ってもらうとともに、「自分の目で見えた福島を自分の言葉で語ってもらう」ための研修旅行企画を実施しました（福島南ロータリークラブとのコラボ）。



5 飯舘村中学生のドイツ研修旅行支援

飯舘中学校の生徒がドイツに「再生可能エネルギーと持続可能な村づくり」を学びに行く、「未来への翼」事業。大学生がこの旅行に同行して中学生から、その新鮮な驚きを引き出すとともに、報告会の準備もしました。現在、学びの成果を広く伝える映画を作成中です！



6 被災者の立場にたった支援活動 「かーちゃんのカプロジェクト」

みずから被災者でもある福島大学生も、故郷を離れて避難せざるを得なくなった人たちの支援に。自らの力で自分たちの働く場と加工場の再建をめざす阿武隈地域の「かーちゃん」(女性農業者)の自立の試みを、側面から支援しています。福島農業の復興を目指す活動でもあります。



7 放射能の影響について、自ら学び、自ら考える

放射能の影響をどう考えるかは、学生たちがみずから問いを立てそれへの自分なりの答えを探していく問題です。勉強会を開く、大阪や敦賀、松本まで、放射線や被ばく問題に鋭い発言を続ける方々を訪問する、「避難」について考えるコンサートを開く…多彩な活動を行っています。



8 福島大学災害ボランティアセンター（ぼらせん）

大学内に設置された一次避難所の運営を引き継ぐかたちで発足した福島大学災害ボランティアセンター。継続的な足湯活動や子どもたちの学び支援など、仮設住宅でのさまざまな活動は、高く評価されています。この夏には、県外に移動した家族の心を開放し、ふるさと福島で「家族の絆」「福島の絆」をつむぐ機会を持ちたいという思いのもとで企画・実施したプロジェクト。山形、新潟などから多くの家族が南会津に集まりました（アサヒグループとのコラボ）。ぼらせんのHPは、<http://fukudai-volunteer-center.jimdo.com/>。

